

日本ロボット学会誌 L^AT_EX 2_ε クラスファイルの使い方 (v2.0 2018年9月21日版)

会誌編集委員会* 論文査読小委員会*

How to Use “jrsj.cls” Class File for the Journal of the Robotics Society of Japan (v2.0 2018.09.21)

Journal Editorial Committee* and Refereeing Sub Committee*

The Robotics Society of Japan has designed L^AT_EX 2_ε class file named `jrsj.cls` for the Journal of Robotics Society of Japan. It can be used both for papers and articles (Kouza, Kaisetsu, Tembou and so on). This document describes how to use the class file, and also makes some remarks about typesetting a document by using L^AT_EX 2_ε. This class file is fundamentally designed based on ASCII pL^AT_EX 2_ε. This document itself is an example of the usage of this class file.

Key Words: Class file, ASCII pL^AT_EX 2_ε, Typesetting

1. はじめに

論文および一般記事の執筆上にかかわる注意事項は、「論文原稿作成要領」を参照してください。ここでは、クラスファイルの使用にかかわる点のみを説明します。

`jrsj.cls` クラスファイルは、オプションを指定することにより、論文（総合論文、学術・技術論文、解説論文、研究速報、レター、討論）および一般記事（解説、随想、展望、講座、講演など）の両方のフォーマットで利用できます。

「論文」は、本文の活字の大きさを、写植の単位の12級（3×3 mmの大きさの文字、9 pt 相当）に設定しています。また、「一般記事」は、活字の大きさを、13級（3.25×3.25 mmの大きさの文字、10 pt 相当）に設定しています。本文のサイズ指定は、「論文」は `\small`、「一般記事」は `\normalsize` となっています。

本誌の組版ルールに従って、各種パラメータと出力形式を変更しています。したがって、レイアウトに関するパラメータは変更しないでください。

2. クラスファイルの説明

ドキュメントクラスのオプションに、「論文」の場合は `paper` を、「一般記事」の場合は `article` を、それぞれ指定します。何も指定しない場合は、`paper` が指定されたものとみなします。

2.1 テンプレートと記述方法

「論文」の場合と「一般記事」の場合の記述方法をそれぞれ、2.1.1 項と 2.1.2 項で説明します。また、英文原稿の場合の記述方法は 2.1.3 項で説明します。

「論文」形式と「一般記事」形式の違いは、それぞれの種類

を記述する部分、著者の所属の記述、キーワードの記述の部分です。

執筆に際しては、本クラスファイルとともに配布されているテンプレート（`template.tex`）を利用できます。

2.1.1 「論文」形式

```
\documentclass[paper]{jrsj}
\usepackage[T1]{fontenc}
\usepackage{lmodern}
\usepackage{textcomp}
\usepackage{graphicx}
\usepackage{amsmath}
\usepackage{amssymb}
\typeofpaper{学術・技術論文}
%\Year{2018}
%\Vol{36}
%\No{1}
\title{邦文題名}
\subtitle{邦文副題名}
\etitle{英文題名}
\esubtitle{英文副題名}
\authorlist{%
  \authorentry{ロボ 太郎}{Robo Taro}{Tokyo}
  \authorentry{学会 花子}{Gakkai Hanako}{Osaka}
}
\affiliate[Tokyo]{日本ロボット学会}
  {Robotics Society of Japan}
\affiliate[Osaka]{大阪ロボット学会}
  {Robotics Society of Osaka}
\received{2018年9月21日}
\evaluated{本論文は××性（×××分野）で評価されました。}
```

原稿受付 2018年9月21日

*日本ロボット学会

*The Robotics Society of Japan

■ 本論文は××性（×××分野）で評価されました。

```

\begin{document}
\begin{abstract}
  英文要旨
\end{abstract}
\begin{keywords}
  英文キーワード
\end{keywords}
\maketitle
  本文
\begin{acknowledgements}
  謝辞
\end{acknowledgements}
\begin{thebibliography}{99}
\bibitem{1}
  ...
\end{thebibliography}
\begin{biography}
\profile{m}{名前 (Name)}{紹介文}
\end{biography}

```

- `\typeofpaper{}` には論文の種類, 「総合論文」, 「学術・技術論文」, 「解説論文」, 「研究速報」, 「討論」のどれかを記述します。
- `\Year{}`, `\Vol{}`, `\No{}` は, 発行年, 巻数, 号数を指定します。これらは柱に出力されます。それぞれアラビア数字を記述します。
論文執筆時に掲載される号が未定の場合は, コメントアウトしておいてください。
- `\title{}` には邦文題名を記述します。任意の場所で改行する場合は, `\\` で改行します。
引き数は, 柱にも出力されます。タイトルが長すぎて柱の文字がはみ出す場合 (ワーニングが出力されます) などは, `\title[短い邦文題名]{邦文題名}` という形で, 柱用に短くした邦文題名を記述できます。
必要に応じて, 邦文副題名を `\subtitle{}` に記述できます。これは必須ではありません。
- `\etitle` には, 英文題名を記述します。英文題名は柱には出力されないので `\etitle[短い英文題名]{英文題名}` という使い方はできません。
必要に応じて, 英文副題名を `\esubtitle{}` に記述できます。これは必須ではありません。
- 著者名は次のようなフォーマットで記述します。和文・英文の著者名, 和文・英文の所属などの出力体裁を自動的に整えます。
`\authorlist{%`
`\authorentry{和文著者名}{英文著者名}{所属ラベル}`
`}`
という形です。例えば, 以下のように記述します。
`\authorlist{%`
`\authorentry{ロボ太郎}{Robo_Taro}{Tokyo}`
`\authorentry{学会花子}{Gakkai_Hanako}{Osaka}`
`}`
記述に際していくつかの注意があります。
— 名前の中に英語を含むなど変則的なケースは, アステ付きの `\authorentry*` にします。
— 第 1 引き数の和文著者名の姓と名の間には必ず半角の

スペースを挿入します (スペースを挿入し忘れた場合にはワーニングが出力されます)。

`\authorentry` の和文著者名は柱にも出力されます。
— 第 2 引き数の英文著者名は, (at (a^2)) 頭文字のみ大文字で記述します。

— 第 3 引き数には, 所属ラベルを記述します。このラベルは, 後述の `\affiliate` の第 1 引き数に対応します。ラベルは大学名, 企業名, 地名などを表す短く簡潔なものにします。

著者に所属がない場合は, `none` と指定します。また, 2 か所の所属がある場合には, ラベルをカンマ “,” で区切ります。

ラベルの前後やカンマの後ろにスペースを挟まないでください。 `{Tokyo}` と `{Tokyo_}` は所属を違うものと判断します。

— `\authorlist` マクロは, 著者名や所属の出力体裁を自動的に整えますが, 著者が多数の場合などに, 任意の場所で改行を行いたい場合は, `\breakauthorline` コマンドが使用できます。これは英文著者名だけに有効です。 `\breakauthorline{3}` とすれば 3 人目の英文著者名の後ろで改行します。

また, `\breakauthorline{2,4,6}` とすれば, 2 番目, 4 番目, 6 番目の英文著者名の後ろで改行します。

• 所属は, 次のようなフォーマットで記述します。

```
\affiliate[所属ラベル]{邦文所属}{英文所属}
```

これらの情報は, 脚注部分に出力されます。

記述に際していくつかの注意があります。

— 第 1 引き数は `\authorentry` で指定したラベルを記述します。第 2 引き数には邦文の所属を, 第 3 引き数には英文の所属を記述します。

— ラベルの前後に余分なスペースを挿入しないでください。

— `\authorentry` で記述したラベルの出現順に記述してください。

• `affiliate` のラベルが, `\authorentry` で記述したラベルと対応しないときは, ワーニングメッセージが端末に出力されます。

• `\received{}` には, 原稿受付日を記述します。原稿受付日は学会が記入するため, 引き数は空にしておいてください。

• `\evaluated{}` には, 「本論文は××性 (××××分野) で評価されました。」の文言を記述します。

• 英文要旨は `abstract` 環境に, 英文キーワードは `keywords` 環境にそれぞれ記述します。

• `\maketitle` は `keywords` 環境の直後に記述します。

• 謝辞がある場合には, `acknowledgements` 環境に記述します。

• 参考文献は, `thebibliography` 環境に記述します。

• 付録が必要な場合は, `\appendix` コマンドを記述した後に本文を記述してください (7 ページ参照)。数式番号は “(A.1)” のようになります。

• 著者紹介は, 「総合論文」, 「学術・技術論文」, 「解説論文」に必要です。以下のようなフォーマットで記述します。

```

\begin{biography}
\profile{m}{名前 (Name)}{紹介文}
\profile{n}{名前 (Name)}{紹介文}
\end{biography}

```

`\profile` の第 1 引き数に、ロボット学会会員資格の別を記述します。m と記述すると“(日本ロボット学会正会員)”が、s と記述すると“(日本ロボット学会学生会員)”が、それぞれ紹介文の最後に追加されます。n と記述した場合は何も追加されません。第 2 引き数には名前(全角括弧で英文名を続ける)を、第 3 引き数には紹介文をそれぞれ記述します。

2.1.2 「一般記事」形式

```
\documentclass[article]{jrsj}
\usepackage[T1]{fontenc}
\usepackage{lmodern}
\usepackage{textcomp}
\usepackage{graphicx}
\usepackage{amsmath}
\usepackage{amssymb}
\typeofarticle{解説}%
%\Year{2018}
%\Vol{36}
%\No{1}
\title{}
\subtitle{}
\etitle{}
\esubtitle{}
\authorlist{%
  \authoreentry{姓 名}{First Family}{label}
  \authoreentry{}{}
}
\affiliate[label]{邦文所属}{英文所属}
{邦文住所}{英文住所}
\received{}
\keyword{}
\begin{document}
\maketitle
%% 本文
\begin{thebibliography}{99}
\bibitem{}
\end{thebibliography}
\begin{biography}
\profile{m}{名前 (Name) }{紹介文}
\profile{n}{名前 (Name) }{紹介文}
\end{biography}
```

「論文」形式と異なる部分について説明します。所属の記述については、「論文」形式と同じにするとエラーになりますから、注意してください。

- `\typeofarticle` には、一般記事の種類、「随想」、「展望」、「解説」、「講座」、「講演」などを記述します。
- 所属は、次のようなフォーマットで記述します。邦文住所と英文住所を記述するため、引き数が 5 つに増えます。
`\affiliate[所属ラベル]{邦文所属}{英文所属}`
`{邦文住所}{英文住所}`
- キーワードは `\keyword` に記述します。「論文」形式で使った `keywords` 環境と混同しないでください。

2.1.3 英文の場合

ドキュメントクラスのオプションとして `english` を指定します。

```
\documentclass[article,english]{jrsj}
```

- 英文題名と副題名は、それぞれ `\title`、`\subtitle` に記述します。`\etitle`、`\esubtitle` は記述しても無効になります。
- `\authoreentry` の第 1 引き数(和文著者名)に記述しても無効になります。空でかまいません。
- `\affiliate` の邦文所属と邦文住所は記述しても無効になります。空でかまいません。

2.2 クラスファイルの特徴と注意事項

2.2.1 見出しの字どり

章見出し(`\section`)は、見出しが 6 字以下の場合、7 字どりになり(1 章などを参照)、センタリングされます。任意の場所で改行したい場合は、“\”で折り返してください。

2.2.2 別行立て数式

- 別行立て数式は、センタリングで出力されます。
- 数式番号は右端から 1 字入ったところに出力されます。本誌では、数式番号は全角の括弧が使用されますので、本文中で数式を参照する場合は、`\eqref` か、`amsmath` パッケージを使わない場合は、半角括弧ではなく全角括弧を使用してください(例:“式(`\ref{eq:1}`)”)。
- 本誌の場合は 2 段組みで、1 段の左右幅がせまいため数式と数式番号が重なったり、数式がはみ出したりすることが頻繁に生じると思われます。`Overfull \hbox` のメッセージに気をつけてください。
- 数式の記述に関しては、3.2 節および 3.3 節でも説明しています。

2.2.3 図表とキャプション

図表の出力位置を指定するオプションとして、`[h]` は使わず、`[t]`、`[b]`、`[tbp]`などを指定して、ページの天か地に出力させるようにしてください。

図の読み込み

近年では PDF の利用が推奨されています。図は基本的に PDF 形式のファイルを読み込むようにして下さい。

- `graphicx` パッケージのオプションに `dvipdfmx` を指定します。

描画のために `tikz` パッケージを利用する場合は、`\documentclass` のオプションに `dvipdfmx` を指定することを薦めます。

- 適当なアプリケーションで図を作成し保存形式を pdf にします。
- PDF ファイルはファイルの内部に `BoundingBox` の情報を持っていませんので

```
\includegraphics
```

```
[bb=0 0 横ポイント数 縦ポイント数,
```

```
width=幅]{file.pdf}
```

などと明示的に `BoundingBox` の値を記述するか、ターミナル上で以下のように `extractbb` を実行し

```
extractbb file.pdf
```

コンパイル時に、生成された `file.xbb` というファイルから、`BoundingBox` の情報を得る方法がありましたが、TeX Live 2015 以降、MacTeX-2015 以降、W32TeX では、コンパイル時に自動的に `extractbb` を実行して `BoundingBox` の情報を取得できるようになりました。

`xbb` ファイルを生成しておいたほうがコンパイルの速度は若干速くなります。この場合は、図を修正したとき、そ

の都度 `extractbb` を実行する必要があります。

- 詳しくは以下の URL を参照されることを勧めます。

TeX Wiki: <https://texwiki.texjp.org/>

PDF ではなく PostScript (EPS) の図を読み込みたいときは、

```
\usepackage[dvips]{graphicx}
```

と指定します。

表の記述

表は `\footnotesize` (8pt, 11 級) で組まれるように設定しています。例えば、以下のように記述します。

```
\begin{table}[tb]
\caption{「論文」形式の場合は、英文キャプション}
\label{table:1}
\begin{center}
\begin{tabular}[t]{|c|c|c|}
\hline
A & B & C \\
\hline
\end{tabular}
\end{center}
\end{table}
```

`\caption` は `tabular` 環境の前に記述します。

キャプションについて

`caption` パッケージは本誌の体裁を変更するので、なるべく使わないようにしてください。

- キャプションは、中央揃えで出力されます。
- 2 段抜き of 図表のキャプションの場合、キャプションの幅をテキストの幅の 2/3 の長さで折り返すように設定しています。任意の場所で改行したい場合は、“`\`” で折り返すことができます。標準の $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ ではこういう使い方はできませんので注意してください。
- 任意の長さで折り返したい場合は、`\caption` の前で `\capwidth=60mm` と記述すれば、60mm の長さで折り返します。
- `\label` を記述する場合は、必ず `\caption` の直後に置いてください。前におくと `\ref` で正しい番号が参照できません。

2.2.4 脚注と脚注マーク

脚注[†]が必要な場合は、`\footnote` を利用してください。脚注マークは “`†`”, “`††`” という形で出力されます。

2.2.5 定理、定義などの環境

定理、定義、命題などの定理型環境は `\newtheorem` が利用できます [4]。標準のクラスファイルでは環境中の欧文がイタリックになりますが、本クラスファイルでは、イタリックにならないように変更しています。

たとえば、

```
\newtheorem{theorem}{定理}
\begin{theorem}
 $n > 2$  に対しては、
方程式  $x^n + y^n = z^n$  の
自然数解は存在しない
(Fermat's last theorem).
```

```
\end{theorem}
```

と記述すれば、

定理 1 (Fermat's last theorem) $n > 2$ に対しては、方程式 $x^n + y^n = z^n$ の自然数解は存在しない (Fermat's last theorem).

と出力されます。

「定理」に番号をつけたくない場合は、`amsthm` パッケージを利用する場合は、

```
\newtheorem*{theorem}{定理}
```

とします。また利用しない場合は、`theorem` が定義されているとすると、

```
\let\thetheorem\relax
```

と記述すれば番号が付きません。

2.2.6 文献の記述

参考文献の著者名、文献名、ジャーナル (出版社)、発行年など、イニシャル、略語のスタイル、順番などは本誌の規則に従ってください。

参考文献のリストは `thebibliography` 環境を使用し、次のような記述例に従ってください。

```
\begin{thebibliography}{99}
\bibitem{jbook}
著者：書名. 引用ページ, 出版社, 発行年.
% (和文著書の例)
\bibitem{ebook}
Author(s): Book Title. pp.XX--YY, publisher, year.
% (英文著書の例)
\bibitem{paper}
著者：「題名」, 掲載誌名, 巻, 号, ページ, 発行年.
% (和文論文の例)
\bibitem{epaper}
Author(s): 「Title」
Name of Journal, vol.W, no.X, pp.YYY--ZZZ, year.
% (英文論文の例)
% 記 載 例
\bibitem{Takahasi93}
高橋, 吉田, 坪内, 木下:
「投稿原稿作成の手引」,
日本ロボット学会誌, vol.11, no.7, pp.88--99, 1993.
\bibitem{Yoshida93}
K.~Yoshida, T.~Tsubouchi and G.~Kinoshita:
「Instruction of making your manuscript」
J. of the Robotics Society of Japan,
vol.11, no.7, pp.88--99, 1993.
\bibitem{Yoshida93b}
吉田, 坪内:
「論文作成のしおり」,
日本ロボット学会第 11 回学術講演会予稿集,
pp.1--5, 1993.
\bibitem{Takahashi94}
K.~Takahashi and G.~Kinoshita:
Guide Lines for Writing Your Paper. pp.6--10,
The Robotics Society Press, 1994.
\bibitem{Asama94}
H.~Asama:
「Fundamental writing」
```

[†]「論文原稿作成要領」によれば、「脚注はないことが望ましい」とされています。

Proc.\ of Int.\ Conf.\ Technical Writing,
Tokyo, Japan, Apr.\ 1994, pp.2001--2006.

2.2.7 文献の引用

- 文献引用の `\cite` は、古いバージョンの `cite.sty` および `citesort.sty` に手を加えたものを使用しています。例えば、`\cite{Bech,Gr,itou,ohno,Seroul,Abrahams,tex}` とすれば、次のように、番号が続く場合は省略し、番号順に並べ変えます [1]~[3] [7] [11] [12] [24].
- `cite` パッケージを利用することもできます。

```
\usepackage{cite}
```

2.2.8 verbatim 環境

verbatim 環境のレフトマージン、行間、サイズを変更することができます [15]。デフォルトは

```
\verbatimleftmargin=0pt
% レフトマージンは 0pt
\def\verbatimsize{\small}
% フォントサイズ (「論文」形式の場合)
\def\verbatimsize{\normalsize}
% フォントサイズ (「一般記事」形式の場合)
```

```
\verbatimbaselineskip=\baselineskip
% 本文と同じ行間
```

ですが、それぞれパラメータやサイズ指定を変更することができます。

```
\verbatimleftmargin=2zw
% --> レフトマージンを 2 字下げに変更
\def\verbatimsize{\footnotesize}
% --> サイズを \footnotesize に変更
\verbatimbaselineskip=3mm
% --> 行間を 3mm に変更
```

2.2.9 jrsj.cls で定義しているマクロ

- (1) `\onelineskip`, `\halflineskip` という行間スペースを定義しています。その名のとおりに、1 行空け、半行空けに使ってください。和文の組版の場合は、こうした単位の空け方が好まれます。
- (2) 二倍ダッシュの“——”は、`\ddash` というマクロを使ってください (3.1 参照)。“—”を 2 つ重ねると、間に若干のスペースが入ることがあり見苦しいからです。
- (3) 「証明終」を意味する記号“□”を出力するマクロとして `\QED` を定義しています [1]。`\hfill\Box` では、この記号の直前の文字が行末に来る場合、記号が行頭に来てしまいますので、`\QED` を使ってください。□を出力するには、`latexsym` または `amssymb` パッケージが必要です。
- (4) このクラスファイルでは、このほかに、**Table 1** のマクロを定義しています。

Table 1 Examples of macros defined by jrsj.cls

macros	output
<code>\RN{2}</code>	II
<code>\RN{117}</code>	CXVII
<code>\FRAC{\$\pi\$}{2}</code>	$\pi/2$
<code>\FRAC{1}{4}</code>	$1/4$
<code>\MARU{1}</code>	①
<code>\MARU{a}</code>	Ⓐ
<code>\kintou{4zw}{記号例}</code>	記号例
<code>\ruby{砒}{ひ}\ruby{素}{そ}</code>	砒素

2.3 AMS パッケージについて

数式のより高度な記述のために、`AMS-LATEX` のパッケージ [27] を使う場合には、プリアンブルで

```
\usepackage{amsmath}
```

と指定する必要があります。

なお、`LATEX 2ε` では `\mbox{\boldmath x}` に代えて、`\boldsymbol{x}` を使うことを勧めます。数式の上付き・下付きで使うと文字が小さくなります。

3. タイピングの注意事項

3.1 一般的な注意点

- (1) 和文の句読点は、“,” “.” (全角記号) を使用してください。和文中では、欧文用のピリオドとカンマ、“,” “.” (半角) は使わないでください。
- (2) 括弧類についても、和文中で欧文を括弧でくくる場合は全角の括弧を使用してください。欧文中ではすべて半角ものを使用してください。
例：スタイル (Style) ファイル / some (Style) files
上の例のように括弧のベースラインが異なります。
- (3) ハイフン (-), 二分ダッシュ (--), 全角ダッシュ (—), 二倍ダッシュ (\ddash) の区別をしてください。
ハイフンは well-known など一般的な欧単語の連結に、二分ダッシュは pp.298–301 のように範囲を示すときに、全角ダッシュは欧文用連結の em-dash (—) として、二倍ダッシュは (——) 和文用連結として使用してください。
- (4) アラインメント以外の場所で、空行を広くとるため、\\ による強制改行を乱用するのはよくありません。
空行の直前に \\ を入れたり、\\ を 2 つ重ねれば、確かに縦方向のスペースが広がりますが、`Underfull \hbox` のメッセージがたくさん出力されて、重要なメッセージを見落としがちになります [9]。
- (5) (`_word_`) のように“()”内や“()”内の単語の前後にスペースを入れないでください。
- (6) プログラムリストなど、インデントが重要なものは、`\hspace*{??mm}` の使用や \\ などによる強制改行) で整形するのではなく、`list` 環境や `tabbing` 環境などを使って赤字が入っても修正がしやすいように記述してください。

3.2 数式記述の注意点

- (1) 数式モードの中でのハイフン、二分ダッシュ、マイナスの区別をしてください。
例えば、
$$A^{\mathrm{b}}\mathrm{mbox}{\tiny -}\mathrm{c}}{\$}$$
$$A^{b-c} \Rightarrow \text{ハイフン}$$

$$A^{\mathrm{b}}\mathrm{mbox}{\tiny --}\mathrm{c}}{\$}$$
$$A^{b-c} \Rightarrow \text{二分ダッシュ}$$

$$A^{\mathrm{b-c}}{\$}$$
$$A^{b-c} \Rightarrow \text{マイナス}$$

となります。それぞれの違いを確認してください。
- (2) 数式の中で、`<`, `>` を括弧のように使用することがよくみられますが、数式中ではこの記号は不等号記号として扱われ、その前後にスペースが入ります。このような形の記号を括弧として使いたいときは、`\langle (()`, `\rangle ()` を使うようにしてください。
- (3) 複数行の数式でアラインメントをするときに数式が + または - で始まる場合、+ や - は単項演算子とみなされま

ディケーション, 1999.

- [5] 野寺隆志: 楽々 L^AT_EX. 共立出版, 1990.
- [6] 奥村晴彦, 黒木裕介: [改訂第 7 版] L^AT_EX 2_ε 美文書作成入門. 技術評論社, 2017.
- [7] 伊藤和人: L^AT_EX トータルガイド. 秀和システムトレーニング, 1991.
- [8] 野寺隆志: 今度こそ AMS-L^AT_EX. 共立出版, 1991.
- [9] 磯崎秀樹: L^AT_EX 自由自在. サイエンス社, 1992.
- [10] 鷺谷好輝: 日本語 L^AT_EX 定番スタイル集. nos.1-3, インプレス, 1992-1994.
- [11] S. von Bechtolsheim: T_EX in Practice. vols.I-IV, Springer-Verlag, 1993.
- [12] G. Grätzer: Math into T_EX - A Simple Introduction to AMS-L^AT_EX. Birkhäuser, 1993.
- [13] H. Kopka and P.W. Daly: A Guide to L^AT_EX. Addison-Wesley, 1993.
- [14] 藤田眞作: 化学者・生化学者のための L^AT_EX—パソコンによる論文作成の手引. 東京化学同人, 1993.
- [15] 奥村晴彦 監修: L^AT_EX 入門—美文書作成のポイント. 技術評論社, 1994.
- [16] 阿瀬はる美: てくてく T_EX. アスキー, 1994.
- [17] 藤田眞作: L^AT_EX マクロの八衢. アジソン・ウェスレイ・パブリッシャーズ・ジャパン, 1995.
- [18] 高山健三: “Inside DVI→PS,” UNIX MAGAZINE, 1994-1996.
- [19] N. Walsh: Making T_EX Work. O’Reilly & Associates, 1994.
- [20] D. Salomon: The Advanced T_EXbook. Springer-Verlag, 1995.
- [21] 中野賢: 日本語 L^AT_EX 2_ε ブック. アスキー, 1996.
- [22] 藤田眞作: L^AT_EX 2_ε 階梯. アジソン・ウェスレイ・パブリッシャーズ・ジャパン, 1996.
- [23] 乙部巖己, 江口庄英: pL^AT_EX 2_ε for Windows Another Manual. vols.0-2, ソフトバンク, 1996-1997.
- [24] ポール・W・エイブラハム: 明快 T_EX. アジソン・ウェスレイ・パブリッシャーズ・ジャパン, 1997.
- [25] 江口庄英: Ghostscript Another Manual. ソフトバンク, 1997.
- [26] マイケル・グーセンス, セバスチャン・ラッツ, フランク・ミッテルバッハ: L^AT_EX グラフィックスコンパニオン. アスキー, 2000.
- [27] マイケル・グーセンス, フランク・ミッテルバッハ, アレキサンダー・サマリン: L^AT_EX コンパニオン. アスキー, 1998.
- [28] ビクター・エイコー: T_EX by Topic—T_EX をよく深く知るための 39 章. アスキー, 1999.
- [29] M. Goossens, and S. Rahts: The L^AT_EX Web Companion. Addison-Wesley, 1999.
- [30] ページ・エンタープライゼス: L^AT_EX 2_ε 【マクロ&クラス】プログラミング基礎解説. 技術評論社, 2002.
- [31] 吉永徹美: L^AT_EX 2_ε 【マクロ&クラス】プログラミング実践解説. 技術評論社, 2003.

付録 A. 標準のクラスファイルから削除したコマンド

本誌の体裁に必要なのないコマンドは削除しています。削除したコマンドは、`\part`, `\theindex`, `\tableofcontents`, `\titlepage`, ページスタイルを変更するオプション (`headings`, `myheadings`) などです。

佐藤基昭 (Motoaki Sato)

株式会社ウルス, 〒113-0022 東京都文京区千駄木
3-21-15 (TEL 03-5842-1290 / FAX 03-5842-
1295)